7. 次年度以降における調査研究成果とその展開方向性について

1. 平成 28 年度事業の成果

(1) 調査研究

① ギャップ調査

当村の主要顧客層である都市部消費者（首都圏および関西圏）を対象として「座間味村に対する認識」と「興味あるコンテンツ」の隔たり（ギャップ）に関する調査を行った。

- 認知度に関しては 23.3%と想定の範囲内であった。
- これらの層は概して、座間味村を「夏の海」「マリンレジャー」といったイメージで捉え、それらの目的に沿って来訪しているものと考えられる。

- 一方、興味あるコンンテンツとして上位にあげられているコンテンツとして、「海」は当然ながら上位となっているが、「夕日」、「星空」、「絶景」など季節を限定しない地域資源や島のイメージと連動する「海鮮料理」などが「海」と大差なく多数あげられている。

現在、観光地としての当村の最大の課題は夏季に入り込み客が集中することにある。現状では「夏の海」のイメージの強い座間味であるが、閑散期においても訴求力の高い地域資源が現状ではあまり認知されず多数所在していることが確認された。
これら低利用の資源を有効活用することにより閑散期の誘客につなげる可能性があると考える。

② 先進地事例研究

当村と立地条件の類似する観光地を中心として先進地事例調査を行った。地域資源の活用をベースとしていかにお客様におもてなしを提供しているか、観光消費受け皿としての特産品やインショクメニューの充実度、回遊性確保の工夫など、各参加者が問題意識を持ち視察を行った。
視察研究は参加者間の共通意識の醸成にも資するものとなり、本調査研究事業を遂行するうえで有効な取り組みとなった。

(2) アクションプランの策定

前記の調査成果を活用し、作業部会において秋季、冬季、春季における具体的なアクションプラン（アクティビティ、グルメ、ショッピングなどを組み合わせた滞在プランの提案）を策定した。
あわせて、これらを適切に情報発信していくための手法について研究活動を行った。
いずれも現時点では即時に実施することに課題はあるものの、今まではあまりなされていなかった閑散期における誘客の方向性について検討する貴重な機会となった。

2. 平成 29 年度以降の事業展開

平成28年度調査研究事業の成果を活用し平成29年度以降は実証実験を展開し情報収集につとめたい。

(1) 閑散期における観光プログラム開発

ギャップ調査等において高い興味の示された「夕日→星空」といった新たなテーマの観光プログラム開発に取り組みたい。現在、座間味村では日帰り観光客が多く、その一因として「夜の楽しみの少なさ」が推定される。
「星空」については現在ではさほど多くないものの観光における中心的な顧客層とされる 30 代～40 代女性から特に高く支持されており、これらの層を意識し「星空」をテーマとした宿泊付きのプラン策定に取り組みたい。
ほかにも自然探索、海鮮グルメなど、調査研究成果に基づく新たな切り口の観光プログラム開発を進める計画である。

(2) 情報発信

本年度調査研究事業の重要なテーマのひとつとして掲げた「情報発信」、特にパブリシティー対応に本格的に着手したい。
既存の低利用の地域資源、新たな切り口の観光プログラムについて、ターゲットを明確に想定し、特に閑散期において情報発信活動を継続展開する。

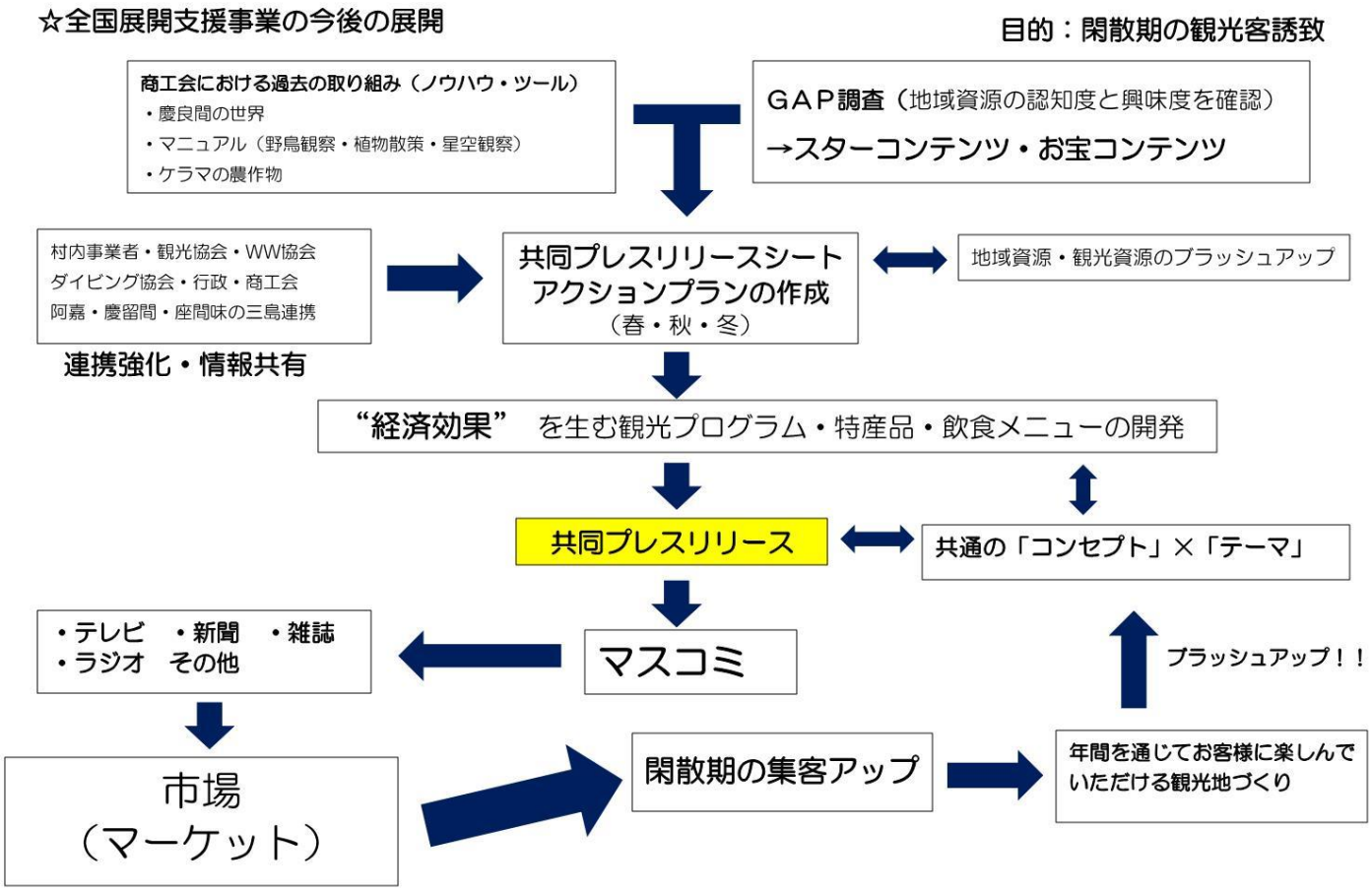
(3) 顧客満足の視点に立脚した観光消費受け皿機能の強化

ブランド化＝ファンづくりととらえるべきだろう。当村には魚介類をはじめとして柑橘類などなど良質な一次産品が数多くある。しかし現状ではブランド品とし流通しているとは必ずしもいえない。これらの価値を適切に情報発信することが当地産品のブランド化、特産品づくりそのものといえるのではないか。
また、良質な地元素材を活用し、季節感があり郷土らしさを感じさせる食の提供、記念の品の買物等の消費行動が観光の満足度を高める重要な要素であり、同時に経済効果としても着目されるべきである。
観光プログラムと整合性のとれた飲食メニュー開発、特産品開発は滞在の満足度を高めるための重要な要素であり、観光地として当然に求められるインフラともいえる。
観光振興とあわせ、特産品の掘り起こし・情報発信、魅力的なみやげ品づくりにも取り組んで行きたい。

(4) 観光人材育成

自然保護、安全性の確保、参加者の深い理解のためにはガイドが必須であり、同時に、観光客との交流機会ともなる。知識、話術、接客技術などガイドとしての資質を有する人材の発掘および育成は観光プログラム展開のための必須事項である。
人材育成のためのセミナーへの参加、先進事例の調査などを通じて観光人材育成に取り組みたい。

(5) 受け入れ体制の確立

顧客からのガイド受注や斡旋、宿泊施設の紹介など、円滑な受入れを実現するための主体を確立する必要がある。既存組織の活用を含め、顧客視点に立った総合的な観光受け入れたいについて検討を進めることも必須と考えている。
また、星空ツアーなど観光プログラムの「品質保証」のためにもなんらかの認定制度も必要と判断している。

観光立村といえる当村における現状における課題は、閑散期における誘客促進といえる。本年度調査研究事業の成果を活用し、ブランド力を一層高め、年間を通じて楽しめる観光地を目指した活動を展開していきたいと考える。